



この地域にあって身近に親しまれている山や、はるかに望む山々について、まつわる歴史や文化を紹介します。



▲南方上空より富士山を望む

【富士山（ふじさん）】

標高357M

この国を代表する霊峰、富士山の名を冠した山が、山之上町北部にあることをご存じですか。「山之上富士山」（国土地理院発行の地図では「富士山」と記載）と呼ばれるこの山は、特に三和方面から眺めると線対称の輪郭が際立つ美しい山で、江戸時代、臨済宗の僧であった白隠慧鶴（白隠禅師…1685～1768年）が、岩瀧山での修行の時に眺めていた山とされ、山頂の富士神社には白隠が記した「濃陽富士山記」（市指定有形文化財）が納められていました。

これは白隠の最初期の書であること

とのほか、修行を援助した鹿野善兵衛から聞いた山之上富士山の由来が記されていることにも注目です。内容によると、富士山の信仰者だった善兵衛の先祖は、年老いて再びその霊場に参詣できないことを憂いていたところ、夢でお告げを受け、目を覚ますと手には金色の仏像が輝いていたそうです。先祖は歓喜して村に帰ると、山頂に祠を建ててそれをまつり、持ち帰った小松を植えて、その山を「富士山」と名付けました。それ以来、村人はこの山に祈りを捧げ



▲山頂の富士神社

て大切にしてきたようです。この話がいかに白隠に大きな衝撃を与えたかは、文末の「戦慄して書す」という結びから想像できます。それは、白隠の生まれの駿河国原宿（現静岡県沼津市）は富士山の裾野にあり、宝永4（1707）年に起きた大噴火の経験から、白隠は故郷と修行の地それぞれで富士山を重ね合わせ、その霊威に恐怖する一方で、崇敬の念を感じていたからでしょう。

ここで白隠は山之上富士山の教えを改めて村人に説き、その地に再び信仰を根付かせました。白隠はこの富士の名を「普慈」とも表現しています。本家の十分の一にも満たないこの富士山は、それに引けを取らないほど深い慈悲によって、広く人々を照らしてきたのです。

【参考文献】

- ・『白隠「濃陽富士山記」について（荒川元暉著…1993年）』
- ・『展示図録「まちのいいものよいところ―山之上―展」（美濃加茂市民ミュージアム…2017年）』
- ・『展示図録「墨痕に咲く―美濃の禅画の世界 白隠と仙厓と―」（美濃加茂市民ミュージアム…2022年）』